

風はささやく

小川未明

青空文庫

高窓たかまどの障子しょうじの破れ穴やぶあなに、風かぜがあたりと、ブー、ブーといって、鳴なりました。もう冬ふゆが近づちかづいていたので、いつも空そらは暗くらかったです。まだ幼年ようねんの彼かれは、この音おとをはるかの荒あらい北海ほっかいをいく、汽船きせんの笛ふえとも聞ききました。家いえから外そとへ飛とび出だして、独ひとり往來おうらいに立たつていると、風かぜが、彼かれの耳みみもとへ、

「明日あしたは、いいことがある。」と、ささやきました。

「そうだ、きつとお父とうさんが、明日あした歸かえつていらつしやるのだ。」

彼かれは、希望きぼうを持もつて、明あかるくその一日いちにちを過すごすのです。

彼かれの生うまれた町まちは、小ちいさな狭せまい町まちでした。火ひの見みやぐらの頂いただきに、風車ふうしやがついていて、風かぜの方向ほうこうを示しめすのであるが、西北せいほくから吹ふくときは、天てん氣きがつづいたのであります。空あき車ぐるまの上うへへ馬ま子が乗のつて、唄うたなどうたい、浜はまの方ほうへ歸かえる、ガラ、ガラという、轍わだちの音おとが、だんだんかすかになると、ぼんやり立たつて、聞きいている彼かれの耳みみもとへ、風かぜは、

「明日あしたは、いいことがある。」と、ささやくのでした。

すると、急きゆうに彼かれの目めは、喜よろこびに燃もえるのでした。

「そうだ、明日あしたは、お客きやくさまがあるのかもしれない。」

まれに、彼の家へ珍しい客があつて、おもしろい話をしてくれるのを、彼は、どんなにうれしく思つたでしょう。

ある日、彼は、停車場で、美しい女の人を見ました。ようすつきから、この土地の人でなく、旅の人だということがわかりました。そして、いいしれぬやさしい顔は、かえつて悲しみをさえ感じさせたのです。彼は、その人の顔を忘れることができませんでした。汽車が遠く去つてしまつた後、かぼちやの花の咲く圃に立ち、無限につづく電線の行方を見やりながら、自由に大空を飛んでいるつばめの身を、うらやんだことがありました。ちようど、そのころ、他国から歸つた、親類のおじさんがありました。一同は、この人のことを道楽者だと、よくいわなかつたけれど、彼には、いつも思いやりのある言葉をかけてくれたし、怒つた顔を見せなかつたので、なんとなく慕わしく思われました。おじさんは、孤独なのが、さびしかったのでしよう、ときどきマンドリンなど鳴らして、独りで自分をなぐさめていました。このことを知つたときから、彼にも音楽が、なによりか好きなものとなつたのです。

彼の少年時代は、いつしか去りました。そして、小さな町をはなれて、大きな市へ移るころには、彼はもうりっぱに働きのできる若者でありました。けれど、心に芸

術^{わす}を忘れなかつたのです。

町^{まち}の中を川^{かわ}が流^{なが}れていた。橋^{はし}の畔^{もと}に食^{しょく}堂^{どう}がありました。彼^{かれ}はこの家^{いえ}で友^{とも}だちといつしよに酒^{さけ}を飲^のんだり、食^{しょく}事^じをしたのでした。和^わ洋^{よう}折^せ衷^{ちゆう}のバラック式^{しき}で、室^{しつ}内^{ない}には、大きな鏡^{かがみ}がかかつていました。その傍^{かたわ}らには、幾^{いく}つもびんの並^{なら}んだ棚^{たな}が置^おいてあつた。酒^{さけ}と脂^{あぶら}のにおいが、周^{しゆう}圍^いの壁^{かべ}や、器^き物^{ぶつ}にしみついていて、汚^{よご}れたガラ^{まど}ス窓^{まど}から射^さし込^こむ光^{ひかり}線^{せん}が鈍^{にぶ}る上^{うへ}に、たばこの煙^{けむり}で、いつも空^{くう}氣^きがどんよりとしていました。たとえ四^し季^きおりおりの花^{はな}が、棚^{たな}の上^{うへ}に活^いけてあつても、すこしも新^{しん}鮮^{せん}な感^{かん}じを与^{あた}えず、その色^{いろ}があせて見^みえた。それとくらべていいように、そこにいる女^{おんな}たちは、濃^こく口^{くち}紅^{べに}をつけ、顔^{かお}に厚^{あつ}く白^{おしろい}粉^ぬを塗^ぬつていたけれど、なんとなく若^{わか}さを失^{うしな}い、疲^{つか}れているように見^みえたのです。

しかるに、彼^{かれ}は、あるとき、ハーマモニカで、「故^こ郷^{きやう}の歌^{うた}」をうたいました。目^めに広^{ひろ}々とした、田^{でん}園^{えん}を望^{のぞ}み、豊^{ほう}穰^{じやう}な穀^{こく}物^{もつ}の間^{あいだ}で働^{はたら}く男^{だん}女^{じよ}の群^むれを想^{そう}像^{ざう}し、嬉^き々として、牛^{ぎゆう}車^{しや}や、馬^{うま}の後^{あと}を追^おう子^こ供^{ども}らの姿^{すがた}を描^{えが}いたのであります。

一曲^{きよく}終^おわると、すすり泣^なく女^{おんな}の声^{こゑ}がしました。翌^{よく}日^{じつ}この店^{みせ}をやめて、故^こ郷^{きやう}へ帰^{かえ}つた女^{おんな}があります。彼^{かれ}女^{じよ}の故^こ郷^{きやう}が、彼^{かれ}の歌^{うた}が、彼^{かれ}女^{じよ}の魂^{たましい}を呼^よびもどしたのです。

メーデーの日^ひでした。丘^{おか}の上^{うへ}の新^{しん}緑^{りよく}が、風^{かぜ}に吹^ふかれて、さんさんとした、日^ひの光^{ひかり}

中で躍おどっていました。見みわたすと、乳色ちちいろの雲くもが、ちょうど牧人ぼくじんの、羊ひつじの群れを追おうように、町まちを見おろしながら、飛とんでいくのでした。風かぜは、彼かれの耳みみもとへ、

「明日あしたは、いいことがある。」と、いつものように、希望きぼうをささやきました。

彼かれは、友ともだちと腕うでを組み、調子ちようしをそろえて、労働歌ろうどうかをうたった。その声こえの響ひびく間は、美しい数々の幻想げんそうが浮うかびました。

たとえば、百貨店かてんにあるような、赤あか、青あお、緑みどりの冷たく透すきとおるさらや、コップなどを製造せいぞうするガラス工場こうじょうの光景こうけいとか、忽然こつぜんそれが消きえると、こんどは、高い煙突えんとつから黒い煙くろけむりが流れ、また幾本いくほんとなく起重機きじゆうきのそばえたつ、大きな鉄工場てつこうじょうが現あらわれるのでした。そして、歌うたがやむとともに、それらの形かたちと影かげもどこへか没ぼつしてしまいました。

彼かれが、またハーモニカで、インターナショナルをうたったときには、洋々ようようたる海原うなばらが前面ぜんめんへ盛り上ありました。そして、汽船きせんの過ぎた後あとには、しばらく白浪しらなみがあわだち、それも静しずまると、海草かいそうがなよなよと、緑色みどりいろの旗はたのごとくなごやかにゆれるのであり
ました。

彼かれの青年時代せいねんじだいは、夢ゆめも多おほかつたかわりに、また、反面はんめんあまりに醜みにくかつた現実げんじつのため、焦燥しょうそうと苦悶くもんをきわめたのです。

目で見た、一つの例をとれば、ここに毎朝出勤する紳士があります。その人は、
 気むずかしく、家庭では、なにか氣にいらぬことでもあれば、罪のない細君をしかり、
 子供をなぐったりしたのに、出版社して、上役の前では、まったく別人のごとく、
 頭をぺこぺこして、愛想がよかつたのです。しかるに、上役は、冷然として、皮肉
 な目つきで、その男を見下して、命令します。この場合、だれが聞いても無理と思われ
 るようなことでも、男は、服従しなければなりません。風彩からいえば、そ
 の男のほうが、上役よりりっぱでした。頭髪をきれいに分け、はいているくつも出か
 ける前に、哀れな細君が念をいれてみがいたので、ぴかぴかと光っています。まだ社で
 は、それでもいいが、男は、ときどき上役の家庭へも、ごきげんを伺いに出なければな
 りません。我が家では、妻や子供らに対して、厳格過ぎるといつてもいいのに、上役
 の家では、やんちゃ坊主を晴着の脊中へ乗せて、馬替わりとなつて歩きます。これは、
 そうした社会の話であるが、音楽家や、ほかの芸術家も、また同じでした。ある美
 貌の音楽家は、指に宝石をかがやかせ、すましこんで、ステージに立ち、たとえ聴
 衆を睥睨しながら歌つても、蔭では、権力のあるものや、金力あるもののめ
 かけであつたり、男どもには、幫間に類するやからが少なくなかつたのでした。

こうした社会を見、こうした現実を知るとき、彼は、余の人のごとく、平然たる
ことができなかったのです。ただ聰明をかいたがため、階級に対しては、組織ある
闘争でなければならぬのを、一途に身をもつて、憎いと思う対象にぶつかりました。
それ故に、結局へとへとになって、揚句は酒場で泥酔し、わずかに鬱を晴らしたの
です。彼は、芸術を商品に墮落させたやからをも憤りました。街頭へ身をさら
し、雪まじりの風の吹く中で、バイオリンを弾き、悲痛の唄をうたつて、道ゆく人の足を
止めようとしました。けれど畢竟自分を慰め、苦痛を忘れさせるものには酒以外な
いことを知ったが、生まれた日から、今日まで、瞬時も休まず鼓動をつづける心臓に
触れて、愕然として、彼は、真に自身をあわれむ気が起こったのでした。

ほんとうに、ブルジョアに隷属する彼らが、よんど沼の中にながれた材木であ
り、縛つたなわもろとも、いつか腐る運命にあるなら、彼は、さながら激流の彼方
の岸、此方の岩角と衝突しながら、漂いいくいかだのごときもので、時代の犠牲た
ることに異いがなかったのです。

ある日、彼は、若い時分、下宿していたところのある所を通りました。橋の畔にあつた
食堂は、もうそこになかった。あのころの娘は、すべてお嫁にいき、母親となつて、

生まれた子供も、大きくなったであろう。それだけでなく、あのころの男の子は、兵隊にいき、なかには、すでに戦死したものもあるであろう。こう考えると、彼は、歩きながら感慨無量なものでした。記憶に残る床屋があつたので入りました。もちろん主人もちがつていれば、内部のようすも変わっていました。それよりも驚いたのは、鏡に映つた自分の姿でありました。頭髮は、半分白く、顔には小じわが寄つて、当年の若々しさが、まったく消え失せてしまつたことです。

ふたたび、路上へ出ると、風が、耳もとで、「みんな流れのごとく去つてしまつた。」と、ささやきました。彼は頼りなく、さびしく、独りうなずいたのでした。

丘へ上がると、春のころは、新緑が夢見るように煙つた、たくさんの木立は、いつのまにかきられて、わずかしが残つていなかった。足もとには、小さな家屋がたてこんで、物干しの洗濯物が、夏空の下で、風にひるがえり、すこしばかりの空き地で、子供が、鬼ごっこをして遊んでいました。

一人ハーマニカを持つた、男の子がいました。その子は、鬼ごっこに加わらず、ぼんやり立っていたので、彼は、そばへいき、ハーマニカを借りて、いまなお子供たちに親しまれる、ちようちよう、ちようちよう、菜の花にとまれを吹いて、聞かせたのです。すると、

子供たちは、鬼ごっこをやめて、

「おじさんは、うまいんだなあ。」と、たちまち彼を取り巻きました。いま子供らの目は、いずれも遠い、美しいものを憧れているのです。彼は、その姿のうちに、少年時代の自分を見いだしました。そして、あの、なつかしい親類のおじさんを。

「おじさんは、どこからきたの？」と、子供が、ききました。

「あつちから、君たちとお友だちになりきたのだよ。」と、彼は、答えました。

「ほんとう、ここは涼しいよ。そんなら、明日から、木の下で、おもしろいお話をしてくれたり、ハーモニカを吹いて聞かしてくれよ。」

「いいとも。」

このとき、風は、頭の上で、さわやかにささやきました。

「明日から、いいことがある。」

彼の胸に、かすかながら、ふたたび希望がよみがえったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「人民戦線」

1946（昭和21）年5月号

初出：「人民戦線」

1946（昭和21）年5月号

※表題は底本では、「風《かぜ》はささやく」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年4月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風はささやく

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>